

## 令和5年度（第121回）島根県立 安来高等学校 卒業式 学校長式辞

- 木々が芽吹きはじめ、春の息吹が感じられる、今日のよき日に、  
中の海会会長 白根<sup>ひとし</sup> 様をはじめ、多数のご来賓の皆様、  
並びに保護者の皆様にご臨席を賜り、令和五年度 島根県立 安来高等学校  
第百二十一回 卒業証書授与式を、かくも盛大に挙行できますことは、  
誠に大きな喜びであります。ご臨席の皆様には厚くお礼を申し上げます。  
ただいま、卒業証書を授与されました、百四十三名の皆さん、  
卒業、おめでとうございます。卒業にあたって、生徒の皆さんに校長として、  
最後の言葉を贈りたいと思います。
- おそらく、皆さんの中には、この会場に足を踏み入れた瞬間、  
三年前の春、まさに、この場所で行われた入学式の景色と、重ね合わせながら  
思いをめぐらせた人も多いのではないのでしょうか。
- その、三年前の入学式において、当時の柳樂前校長先生は、  
「挑戦、熱意、創意、誠意」という、言葉に込められた思いを、  
皆さんに伝えられました。  
それは、「自分はこうありたい」という「志」を持って、  
創意工夫を重ねながら取り組むこと。そして、その過程を通して、友人や先生、  
そして、地域の多くの方々との繋がりが、自然と深まっていくということ。  
加えて、努力した誰もが、思い描いた目標や夢を、  
必ずしも、そのままの形で実現できるとは限らない。  
ただ、その時に得た財産は、人生の中で一番の宝物になる、というお話しでした。
- その後、皆さんの高校生活は、世界的なコロナ禍に見舞われ、  
声を出し、励まし合っの活動や、対面での触れ合いが制限されるなど、  
当初に思い描いていた学校生活が、必ずしも十分に送ることができない日々が  
続きました。  
しかし、その後、徐々に行動制限が緩和され、時を同じくして、  
校長として着任した私の目には、成長が、足踏みしているどころか、  
まさに「高い理想」と「創意工夫」をもって試行錯誤を重ねながら、  
成長し続ける皆さんの姿が、とても、まぶしく、そして、たくましく映った事を、  
今でも鮮明に記憶しています。

- そのような皆さんの、成長の後ろ側には、陰日向で支えてくださった、ご家族をはじめ、本校の心強い応援団である地域の方々の、温かい支えがあったことを、皆さんは、よく理解していると思います。  
加えて、自身の時間を顧みずに、皆さんの成長に実直に向き合ってきた、本校教職員の取組についても、校長として、感慨深く思うとともに、支えていただきました、多くの皆様への敬意と感謝の気持ちを、ここに改めて表す次第です。
- 私は、着任に際し、安来高校は「大人を育てる」学校であると、皆さんに伝えました。「自分で考えて、自分で判断し、自分で実行に移す。そして自分の行動には自分で責任を持つ」そんな大人を育てる学校だと。  
今後、一層、複雑化する社会においては、答えが必ずしも、ひとつに定まらない場面に、数多く遭遇すると思います。  
そのような中で、最適な答えを、誰もが納得する「解」を導き出し、実践していくためには、マニュアルに沿っただけでは、十分な対応はできないと言われます。
- 皆さんは、授業や部活動そして探究活動の中で、まさに、これらの課題に向き合う力を、磨いてきました。  
まだまだ、成長の途上ではありますが、必ず、実社会で貢献できる、高い資質・能力と可能性を備えていると、私は確信しています。  
どうか、この安来高校での学びと、皆さんを育ててくれた、安来の地を誇りにして、自信を持って、新たな舞台へと踏み出してください。  
そして、またいつか、社会の一端を支える「大人」同士として、互いに、語り合える日を楽しみにしています。
- 結びに、本日、ご臨席を賜りましたご家族の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。  
我々は、それぞれの立場で、それぞれの手法でもって、お子様の成長に、寄り添って参った所存でございます。

その上で、三年の間には、多くのご不安、ご心配があった事と存じます。  
長い間、学校を、そして我々を見守り、ご支援をいただきましたこと、  
衷心より御礼申し上げます。

今後とも、本校の良き理解者、応援団として、ご支援を賜りますよう、  
お願い申し上げます。

- ・ 以上、甚だ、短い言葉ではございましたが、教職員を代表し、  
卒業生への花向けと、ご家族、並びに関係の皆様へのお礼の言葉をもって、  
式辞とさせていただきます。

令和六年 三月 一日

島根県立 安来高等学校  
校長 中西 正実